

親子参加型プログラム「おやこエンジョイフェスティバルとうがく」の実践

東海学園大学 教育学部 教育学科
教授 小島 雅生



1. 学生の造形美術教育の対しての意識

これまで、金属素材を中心に立体造形作品を制作・表現することを主な研究としながら、様々な地域でたくさんの人とかかわり、いろいろな造形プログラム・ワークショップをおこなってきました。そのような活動を続けてきた中で、たくさん子どもたちと造形活動の素晴らしさや楽しさを共有できたことは、私にとってかけがえのない経験となりました。そして現在、東海学園大学教育学部において、将来教員や保育士を目指す学生と共に、これまでの経験や出会いを基に、学びを深め合っていくことに努めております。にもかかわらず、教育現場に出る中で、造形・図画工作に対しての苦手意識や不安感を抱いている学生が少なくないと感じています。

小学校教諭や幼稚園教諭・保育士を目指す学生のために開講する「図画工作Ⅰ・Ⅱ」の授業において、幼少の頃からの「図画工作」という教科の印象や思い出・その教科の意味や必要性などを質問すると、多くの学生が図画工作の授業は好きだったと答えました。理由は様々ですが、好きと答えながらも「絵を描くのは苦手」という意見が目立ちました。また、特に図画工作が好きではなく、普段の生活や将来の生活、社会において図画工作が役に立つとは思わない学生にとって、図画工作科の目標は技術や知識の習得を目的とすることこそが大切であるという認識を持っているという傾向があることが分かりました。その認識が、図画工作に対する苦手意識を生み出す一因とも考えられます。造形的な創造活動の基礎的な能力を培う大切さを意識しつつ、「つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う」ということを強く伝えていく必要があると考えます。子どもと共につくりだし表現する喜びを心から感じ、意欲的に造形美術活動に向き合えるための教育を実践していきたいと試行錯誤する中で、学生の心が動き、造形美術教育に対して意識の変化が現れたと見られる授業がありました。学生自身が授業を通して、地域に向けた親子参加型プログラム「おやこエンジョイフェスティバルとうがく」を企画・実践するという授業です。今回はその授業の紹介をさせていただきます。

2. 親子参加型プログラム「おやこエンジョイフェスティバルとうがく」

東海学園大学教育学部保育専攻では2年次において、2017年より春学期（前期）授業を通して、親子参加型プログラム「おやこエンジョイフェスティバルとうがく」の企画・準備・実践をおこなっております。プログラム実践当日は名古屋キャンパスの体育館に、近隣の親子（3歳児以上の幼児とその保護者）100組の参加を募り、「造形あそび」「運動あそび」「音楽あそび」「パネルシアター」に関する学習成果を発表するとともに、学生と親子が一体となって楽しい時間を共有します。授業を通じたプログラム実施に至る経緯やその目的は、以下の通りです。

- ・ 「子どもたちとのかかわりを体験したい。」「実践力を高めたい。」という学生のニーズを実現させる。
- ・ 学生の学びの発表の場をつくる。
- ・ 学生が意欲的・能動的に学習に取り組み、大学への帰属意識を感じることができる実践をする。
- ・ 地域に開放することで、地域との連携を図る。地域に開かれた大学を目指す。
- ・ 東海学園大学独自の魅力的な取り組みをつくる。

プログラム当日を迎えるまでに、学生たちは幼い子どもとその保護者の姿をイメージし、試行錯誤を繰り返しながら準備を進めます。担当教員は、指示や指導よりも、学生が必要とする助言を行うといった姿勢でかかわり、学生が主体的に話し合い協力しながらプログラムをつくりあげていきます。



3. 「造形あそび」プログラムの企画・準備・実践

造形表現領域「造形あそび」プログラムを希望する学生とともに、幼児期における造形とあそびの意義を理解しつつ、親子で楽しみながら造形表現活動を体験できるプログラムを企画・実施しました。イベント会場内が楽しい世界観に包まれるような空間作りと演出のための様々な造形物を制作・展示し、あそびを通して色や形を楽しんだり、ものつくりを楽しんだり、みんなの表現が集まって一つの作品になる共同制作を楽しめるプログラムを目指しました。学生と話し合いを繰り返しながら、「造形あそび」プログラムにおける目標や方針が以下の通りとなりました。

- ・ 学生が授業内で内容を考え準備できるもの
- ・ 学生が授業内でセットや衣装、環境を制作
- ・ 学生がファシリテーターとしてプログラムを進行
- ・ 参加者が造形活動を楽しみ制作できるもの
- ・ 参加者と学生の交流、協働作業、共同制作ができるもの
- ・ 最終的に作品や表現、造形活動の発表の場となり、鑑賞につなげる

参加者である親子と学生自身が、造形活動を心から楽しみ、充実した体験と感動を味わえる時間になることを目指しました。

2018年度の「造形あそび」プログラムでは、「不思議な海の大冒険」をテーマに、企画・準備・実践をおこないました。主に、自由に楽しくあそびを通した造形活動ができるコーナー、親子がものづくりを楽しめるコーナー、参加者と学生一人ひとりの表現が集まって大きな作品になる共同制作のコーナーをつくることを目指しました。



2018年度「おやこエンジョイフェスティバルとうがく」会場風景

自由に楽しくあそびを通した造形活動ができるコーナーでは、色とりどりの紙片をつかった「紙のプール」を準備しました。色とりどりの紙片も学生自身が絵具で表現したものを細かくちぎり用意します。そこであそぶ子どもの身体や衣服に絵具がつかないように、アクリル系の絵具を使用するなどの配慮もします。また「紙のプール」の紙片を用意する中で、学生自身が大きな紙に身体全体をつかって絵具あそびを楽しむ活動もしました。プログラムの準備をするだけでなく、造形美術表現の楽しさを学生自身が体験する機会を大切にしました。プログラム当日の「紙のプール」では、子どもたちの身体全体を使って、夢中になってあそぶ姿が見られました。紙片の模様や色・形、素材の感触や舞い散る動きなど、五感全体で楽しめるあそびとなりました。心を解き放ち、自由に、夢中になってあそび尽くす様子を目の当たりにし感動する学生の姿が印象的でした。



身体全体をつかった絵具あそび



「造形あそび」プログラム会場風景



「紙のプール」であそぶ風景

親子がものづくりを楽しめるコーナーでは、手づくりおもちゃを楽しむことができるよう準備します。子どもの年齢や発達状況を考慮しながら、プログラム当日にできること、素材や道具などの配慮、そして参加者である子どもが喜んでもらえることを中心に考えていきます。素材選びや試作を繰り返しながら、「くらげボンボン」という手袋をつかったおもちゃづくりを実施しました。子どもたちが自分でつくったおもちゃで嬉しそうにあそぶ姿から、つくりあげる喜びと、手づくり作品への愛情を感じ取ることができます。また、保護者からさらに詳しくつくり方などを聞かれ、生き活きと的確に保護者とやりとりする学生の姿が見られました。

みんなで表現し、つくりあげる共同制作のコーナーでは、プログラム当日に参加者の表現が集まり、大きな作品・表現になるものを目指しました。そこで考えたのが「みんなでつくる不思議な海の世界!」。板段ボールに色画用紙を貼り、屏風状に組み合わせ、円筒形の「大きな海の壁」を準備します。そこに様々な表現がされた魚をつくり貼っていき、どんどん魚が増えていく様子を楽しめるものとししました。「大きな海の壁」は当初円筒形の外側のみを青・水色・白などの色画用紙で装飾していましたが、制作途中で「中に入れたらもっと面白



共同制作のための試作と準備



「大きな海の壁」外側 青い海の世界



「大きな海の壁」内側 深海の世界

い」という学生からの意見により、円筒の中に入れる穴を作り、壁の中は黒の色画用紙で装飾し、深海の世界をつくりました。実際につくっていく中で、学生の発想が膨らみ豊かになっていく状況が見られます。壁に貼る魚は、色画用紙を魚の形に切ったものを用意し、そこにペンやクレヨンで表現したり、紙やシールなどをコラージュしたりしてつくります。試作を繰り返しながら、たくさんの魚の形を切り抜き、準備を進めます。プログラム当日は、子どもたちがその色画用紙の魚を釣り上げるあそびから始めました。自分で釣った魚の形に模様を描いたりコラージュしたり、一生懸命表現している子どもの姿に寄り添い向き合う学生の姿が見られました。素敵な魚たちがどんどん泳ぎはじめ、共同制作作品の「みんなでつくる不思議な海の世界！」が完成しました。壁の周りで楽しんだり、中に入って楽しんだり、まさに不思議な海の大冒険を味わうことができました。また、魚のお絵描きの活動が発展し、床に敷き詰めた段ボールにお絵描きが広がりました。それも大切な造形あそびとして考え、その活動が見られることをねらいとし準備しておいたものです。普段はできない思い切った造形活動を心から楽しむ子どもの姿を、学生たちは経験を通して感じることができました。



床に敷き詰めた板段ボールにお絵描きが広がる

4. まとめ

今回紹介した授業を通し、学生が主体的に親子参加型プログラムの企画・準備・実施をした中で、学生に感想を尋ねたところ、「参加者とのかかわりから感じた満足感・充実感が得られた、子どもに関する見方が変わった、自分自身の学び・自己理解・自己成長につながった、協力する大切さ・仲間意識の向上を感じた、参加者への配慮と責任を実感した」などがありました。学生同士が協力し合い、主体的に計画を進め、そのプログラムを実施するまでの過程を通して、教員や保育者として求められる資質を自覚し、意欲的に学ぶことができたと考えます。そこで生まれた自尊感情や自己肯定感は、学生の意識に様々な変化と成長を促します。「造形あそび」プログラムを通して、造形美術表現に対する意識の変化が自然と見られました。図画工作科における技術や知識の習得を目的とすることこそが大切であるという認識を持っている学生がいることを忘れる程、造形美術表現を通して、他者のことを思いやり、心から作りだし表現する喜びを身体全体で感じながら、子どもたちに寄り添い向き合える意識を、学生から感じる機会となりました。そこには造形美術に対する苦手意識や不安感はなく、輝いた表情をした

学生の姿が多く見られました。子どもたちの将来を担う教育者を目指す学生に、造形美術表現の本質や意義・図画工作教育の重要性などを、深く考え理解しようとする機会をつくることが、我々造形美術教育に携わるものの責務だと強く感じています。これからもそのような教育ができるよう頑張っていきたいと思います。